

ニューイングランド商人の企業者史的研究

田 村 光 三

An Entrepreneurial Study on the
New England Merchants

Kōzō Tamura

京都大学・同志社大学共催、American Council of Learned Society 後援の、1971年京都アメリカ研究夏期セミナーに出席し、Merril Jensen(歴史学)、H.F. Williamson(経済学)および J.E. Smith(哲学)などの講義と演習に加わった。

今回はとくに Jonathan Edward「The Puritan Tradition Philosophically Interpreted」をテーマとする哲学部門において、講義をうけ、討論した。

さて18世紀のはじめごろになるとニュー・イングランドの経済社会もかなり発展し、世俗化が進行していた。間断のない人口移動、戦争、西漸運動、あるいは

若干の地域における政教分離の傾向などが原因で、宗教や道徳の頹廃が顕著となってきた。かつての熾烈なピューリタニズムの信仰はすでに埋れ火になってしまった。ハーバード大学やイエール大学出身の、知的で、つめたい牧師たちの説教、一般大衆の形式的な教会づとめ、信仰と実践の乖離、慈善や善意（＝業）と信仰とのすりかえ、道徳の低下——これらはまさにアメリカの「危機」のしるしにほかならなかった。

アメリカを厚くおおったこのような暗雲の中から、電撃のごとく信仰覚醒運動がおこった。この、ニューイングランドの教会と社会を震撼させたりバイバリズム The Great Awakening の指導者こそ、Jonathan Edwards (1703—1758) であった。ジョナサン・エドワードは13才でイエール大学に入学、「昆虫について」という一文においてすでに鋭い観察力と思索力を示し、14才のころ、ロックの「人間悟性論」やニュートンの「プリンキピア」「光学論」などによって、科学と啓蒙思想の洗礼をうけるとともに、幼ないときから牧師の子として宗教的義務を忠実に履行し、一時それから逸脱することがあったとはいえ、霊的に新しい体験をした。かれはニューヨークのプレスビテリアン教会の牧師からイエール大学のチューターを経て、1726年以来ノーサンプトンの祖父の教会の牧師となった。

かの「大覚醒運動」は、そのノーサンプトンにおける説教からはじまったといわれる。かれは単純に「聖書に帰れ」と主張し、古いカルヴィニストの神の審判信仰への復帰を促した。

日常性のヘドロの中で、自己満足している人々にたいし、現実のはかなさと虚偽性に目覚め、人間の本性に巣食う罪とその結果におののき、キリストの救いの「甘美さ」と「光」の中に生きる喜びを見出せと教えた。

「神は汝らを憎み、はげしく怒り給う。地獄のふちで、あたかも燃えさかる炎の上で、あのいまわしい虫けらの如き汝らを、支えておられるのは、神御自身であることを知らぬか」

かれは一連の説教と道徳改革によってコネチカット流域の人々をゆさぶり、悔改めと生活の聖化をすすめた。運動は単に地方的な出来事にとどまらず、アメリカ社会に深甚な影響を刻印した。

ニューイングランドの経済社会の動きは、このような宗教運動と不可分の関係にあり、むしろ宗教運動の実体を理解することによって、その物質的条件の変化も正しく理解出来るという、筆者の在来からの仮説に、今回のセミナー出席は大きな光を投じてくれた。